様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：３２６６０
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2014
課題番号：２５５８００６６

研究課題名（和文）キプリングの事例にみる帝国衰退期英国小説におけるマスキュリニティの弱体化

研究課題名（英文）The Weakened Masculinity in the British Novels of the Period of the Decline of the British Empire -- A Case Study of Rudyard Kipling

研究代表者
松本　和子（MATSUMOTO, Kazuko）

東京理科大学・工学部・教授

研究者番号：９０３８５５４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　900,000円

研究成果の概要（和文）：　キプリングを中心に彼とその周辺作家の小説に登場する男性性が弱体化した人物の検証を通じて、当時、時代を支配していた帝国主義の理想とは乖離した人物が描かれる事例が散見することが確認された。そして、多くの場合、そうした登場人物は作者から断罪されるどころか理解をもって描かれており、大英帝国の衰退と、帝国主義の隆盛の狭間を生きることを余儀なくされた作家の内面を探る切り口になり得る可能性が見出せた。

研究成果の概要（英文）：This project focused on the works of Rudyard Kipling and his contemporaries with the aim of (1) shedding light on their unmasculine characters, (2)investigating these character functions in the stories and (3) examining the reason why Kipling and others deal with such characters who are undoubtedly against the idealized heroes in the age of Imperialism.
Through an intensive reading of their works along with carefully researching major previous studies and their biographies, the project successfully revealed the predicament of the authors living between the age of the decline of the British Empire and thriving Imperialism. It is higly possible that the authors injected their unmasculine temperament which needed to be supressed by the pressures of the age into their characters. The shared techniques by which the authors described the many unmasculine characters which this project exmined, seem to support the idea that such descriptions were effected by the pressures of the time.

研究分野：イギリス文学

キーワード：キプリング　男性性

１．研究開始当初の背景

本研究は、過去の科研費研究（平成２０～２２年度　基盤Ｃ「小説に投影された大英帝国の不安－１９世紀末から２０世紀初頭の英国小説をめぐって」）を推進する過程で、強く興味を惹かれながらも研究を深めることのできなかった二点の作業を連動させ、２０２０年を目途に結果を出したいと考えている研究の全体構想－大英帝国の衰退と同時代英国小説に顕在／隠蔽化されているマスキュリニティ・クライシスとの相関関係の立証－の基盤のひとつにすることを意図したものである。

二点のうちの一点は、大英帝国の衰退と男性性の弱体化との相対関係を同時代の小説の中に跡付ける作業にあたる。過去の研究では、小説に投影された大英帝国の不安の元凶を植民地政策の行き詰まりに求めようとしすぎたために、不安を与えた他の要素の存在に気づきながらもそれらを考察の対象にすることができなかった。その一例がそれまで脈々と続き盤石とさえ思われていた家父長制に基づく社会構造を危機に直面させ、やがては崩壊へと導いたニューウーマンの台頭である。前述したとおり、ニューウーマンの台頭については考察の対象にする余裕がなく当時の研究成果として報告できるものは用意できなかったが、大きな収穫として、小説におけるニューウーマンの台頭－言うまでもなく現実世界を投影しているわけだが－と並行して男性性が弱体化した男性登場人物が少なからず描かれるようになったこと、さらに、前者がいわばスポットライトを浴びたかのように華々しく描かれているのに対し、後者は多くの場合、一見してそうとはわからないように技巧を尽くして隠蔽されて描かれているという傾向を認識するに至った。この認識前全研究課題でのやり残し作業の二点目にあたるキプリング研究と結びついて、本研究の背景となった。

キプリングは、前課題において中心的に扱った作家のひとりである。しかし、研究の方針として周辺作家－ハーディ、フォースター、Ｈ．Ｇ．ウエルズ、マンスフィールド、ロレンスなど－にも目配りを十分にすることになっていたため、もっとも強く関心を惹いた作家であるにもかかわらず、キプリングに焦点を絞ることは不可能であった。そこで、新たな機会を見つけてキプリングに的を絞った研究をする計画は、前研究課題に従事していた当時から希望としてもっていた。都合のよいことに、男性性の弱体化の問題はキプリング研究に深くかかわり得る問題であることの手ごたえは以前から得ていたので、基盤Ｃの科研費研究に続く発展研究を目標に、迷うことなく本研究課題－「キプリングの事例にみる大英帝国衰退期の英国小説におけるマスキュリニティの弱体化」－を申請した。

以上のように、本研究課題の申請時における背景には、長期的研究課題として掲げている「大英帝国の衰退と同時代英国小説に顕在／隠蔽化されているマスキュリニティ・クライシスとの相関関係の立証」の存在が大きく、そこには、大英帝国の衰退と相関関係を持つと推測されるマスキュリニティ・クライシスに光をあてるという明確な目的があった。

一方の動機については、長期的研究課題から派生した過去の科研費研究テーマ「小説に投影された大英帝国の不安－１９世紀末から２０世紀初頭の英国小説をめぐって」の展開に伴い「人種差別主義者、帝国主義者、男性至上主義者」というレッテルでは到底語りつくせない作家としてクローズアップされたキプリングへの強烈な関心が最大の動機づけとなっている。この関心は、言動を通じて男性性と結び付けられることの多いキプリングが実際は男性性と乖離した人物を描いていたという事実が研究を通じて明らかになるにつれていっそう強まり、常に研究を推進させる動機として機能し続けた。

２．研究の目的

本研究は、帝国主義のイデオロギーを色濃く反映した作品を多数著したキプリングが、実は少なからぬ数の男性性が弱体化した登場人物、すなわち、時代の要請とは相容れない人物を創造していた事実に基づき、彼らが描かれた背景と理由を作家の内面と当時の時代思潮から探求、解明することを目的とした。これは、大英帝国の衰退と同時代英国小説に顕在／隠蔽化されているマスキュリニティ・クライシスとの相関関係を立証しようという長期的研究計画の突破口になることを狙った試みにあたる。

平成２５～２６年度にかけての研究期間中に明らかにすることを心がけたのは（１）キプリング個人にとって男性性が弱体化した男性が異質な存在ではなかったことの立証と（２）登場人物に体現される男性性の弱体化に対するキプリングの意識の解明の二点であった。前者については、作家活動開始期から一貫して男性性が弱体化した男性を創造し、時代に反するとして排除するどころか感情移入をしていた痕跡を時系列に作品を読み進めることで明らかにしようと努めた。後者については、時代精神の影響を重く受け、量産されたプロパガンダ的文章が示すとおり、自ら率先して時代精神を発信する役割を買って出たキプリングの個性と独自性を重視し、周辺作家、特にジョウゼフ・コンラッドとの比較研究を通じて、男性性の問題に関してキプリング自身が意図的に隠蔽化を図った、あるいは場合によっては図らざるを得なかった状況をじゅうぶんに吟味し、私信や日記、親しい人物の言葉などに垣間見られる「時代に苛まれるキプリング」の実像の提示を目指した。

学術的特色という観点に立った場合の本研究の目的は、キプリングにおけるマスキュ

リニティに関わる問題の全体像を多面的に把握しようとする点に求められる。具体的には、「男性性が弱体化した登場人物の系譜学的研究」と「周辺作家との影響関係を重視した比較研究」というタイプの異なる二種の研究を、時系列に沿った作品の精読によって進めることで、（１）男性性が弱体化した人物がキプリングの長期にわたる作家活動の初期から登場し、しかも途切れることがないこと（２）男性性が弱体化した登場人物は成人男性とは限らず、彼らの予備軍とも言える少年がること（３）男性性が弱体化した人物は、作家の内面的分裂の産物、言い換えると、作家と双子ないし共犯関係にあるようなものであり、それゆえ、彼らとの距離の取り方でキプリングは他の作家と一線を画していることの三点を結果として示すことを目指したものである。

３．研究の方法

研究初年度は、キプリングの作品における男性性が弱体化した男性の系譜作成とその考察を年度到達目標に掲げたうえで前半と後半とに分け、それぞれに「テーマ」、「目標」、「活動内容」、「活動方法」を定めて行った。具体的には次のとおり。

【平成２５年度】（平成２５年４月１日～平成２６年３月３１日）

＜前半＞（平成２５年４月１日～平成２５年９月３０日）

[テーマ]：キプリングの作品におけるマスキュリニティが弱体化した登場人物の系譜の作成

[目標]：論文による成果発表

[活動内容]：（１）時系列にそったキプリングの作品解読　（２）系譜作成に有意義だと思われる周辺作家の作品解読　（３）論文作成用資料の収集と分析　（４）論文執筆

[活動方法]（１）活動初期から中期は、集中的に作品の解読を行う。主人公のマスキュリニティ・クライシスの問題が、アイデンティティ・クライシスへと深刻化する過程が、ニュー・ウーマンに分類される女性登場人物との関わりの中で赤裸々に語られる『消えた光』を研究上のカギとなる作品とみなし、特に精緻な分析対象にする。短篇集では、『高原平話集』（A）、『交通と発見』（B）、『被創造物の多様性』（C）、『借方と貸方』（D）、『限界と再生』（E）をそれぞれ初期（A）、中期（B）、後期（C）（D）、晩年期（E）の重要作品と定め、各時期の特徴を吟味しつつ時系列で読み進める。（２）文献の収集、とりわけジャーナル関係の文献収集に力を注ぐ。キプリング研究は、１９６０年代頃に盛んに行われた、顧みられなくなった作家・作品の再評価を契機に批評活動が活発化した作家のひとりであるので、優れた批評が相次いで発表された６０～７０年代を手始めに、後期小説に関心が集中し始めた９０年代から現代にいたるまでを広く文献収集対象に据えた。（３）論文の執筆は主として夏季休暇中に行った。[活動方法]の（１）で挙げた『消えた光』の研究に従事している時に夏季休暇を迎えたため、マスキュリニティ・クライシスからアイデンティティ・クライシスへの変容を論文のテーマに決定した。９月末に脱稿し、『紀要』に投稿を試みた結果、掲載を受理された。

＜後半＞（平成２５年１０月１日～平成２６年３月３１日）

[テーマ]：系譜の検証と多角的考察の展開

[目標]：論文／口頭発表を念頭に置いた研究ノートの作成

[活動内容]：（１）新しい観点を積極的に取り入れた系譜の検証　（２）大英帝国衰退期の歴史に関する社会科学系研究の推進（３）研究ノートの作成

[活動方法]：（１）提出論文のフィードバックを吟味の上、系譜の検証を行い、必要に応じて修正を加えた。たとえば、女性登場人物が男性登場人物の男性性弱体化に及ぼす影響に関して視点が欠けていた部分が明らかになったのでその視点の補充を行った。（２）（１）の作業に付随して、系譜上にあがっている登場人物に関して①男性性が誰／何かによって弱体化させられたのか、②それとも自らの意思で抑圧をし続けた結果、弱体化ないしは喪失したのか、③あるいは最初から男性性を持ち合わせていなかったのかの三点について精査した。（３）テクスト中心に進めた前半の研究とバランスを取るために、後半では１９世紀半ばから２０世紀初頭にかけてを扱う歴史書、社会科学関係書を参考書として活用し、新たな知見の獲得に努めた。（４）上記活動の結果を研究ノートに記録し、次年度の論文／口頭発表の基礎資料を整えた。

研究二年目であると同時に研究最終年度については、前半、後半の区別を特に設けることなく通年での「テーマ」、「目標」、「活動内容」、「活動方法」を定めて行った。具体的には次のとおり。

【平成２６年度】（平成２６年４月１日～平成２６年３月３１日）

[テーマ]：周辺作家との比較を利用したキプリングにとっての男性性の問題の鮮明化

[目標]：論文による成果発表

[活動内容]：（１）キプリングの後半の著作の精読　（２）論文作成用資料の収集と分析（３）論文執筆と口頭発表原稿の作成

[活動方法]：（１）比較に利用する周辺作家としてはジョウゼフ・コンラッドを選び、コンラッドの作品に登場する男性登場人物によってキプリングの後期作品に登場する男性性が弱体化した人物を照射することを試みた。具体的には①『闇の奥』の主要登場人物クルツの男性性に関する考察　②『ロード・ジム』の主人公ジムが描く典型的ヒーローとしての自己理想像と、現実におけるその

対極にある自分とのギャップの検証　③『密偵』に登場するスパイたちに共通する精神的脆弱性と男性性の弱体化との接点の吟味を行った。（２）研究期間後半は、研究全体の総括の意味をこめて行う成果発表の準備に集中した。成果発表は平成２７年度内を考えている。発表内容としては①キプリングの作品における男性性が弱体化した登場人物の系譜の発表　②マスキュリニティの功罪に関する考察　が中心になる予定。

４．研究成果

本研究の成果は次の四点に集約される。（１）キプリングの場合、男性性が弱体化した登場人物の創造は著作活動開始直後から最晩年に至るまで絶え間なく行われていたことが確認された。（２）著作全体を概観すると、男性性が弱体化した人物は後期作品に登場する比率が高くなることが突き止められた。（３）多くの事例において男性性が弱体化した背景を探ると、弱体化に対する直接／間接的原因となる女性登場人物の存在が表面化することが検証された。（４）男性性の弱体化に由来するマスキュリニティ・クライシスは、アイデンティティ・クライシスへと変容しやすいことが理解された。このうち、（１）と（２）は、男性性が弱体化した登場人物の系譜を作成することによって明らかになったことであり、系譜作成の成果とみなせる。（３）と（４）については、研究期間中の２本の発表論文において考察を加えたポイントにあたる。平成２５年度の論文は、キプリングを逆照射する狙いで、周辺作家のジョウゼフ・コンラッドの小説を題材にした（「コンラッドの家庭劇―*The Return* 再評価の試み」）。変則的なアプローチであったが、結果としては、キプリング作品における男性性が弱体化した登場人物と女性登場人物との影響関係を視野に入れることなく男性性の問題は語れないという認識を得た。平成２６年度の論文（「勝者なき復讐ゲーム―『損なわれた青春』における男性登場人物をめぐる一考察」）は、キプリングの最晩年の作品を題材に、意味のない復讐に貴重な青春期を費やしてしまった男性登場人物に共通する特徴として男性性の弱体化を位置づけ、伝記資料をもとにキプリングの内面にも踏み込みつつ弱体化の諸相を考察した。

これらの成果の国内外における位置づけとインパクトについては、現時点では報告に値するものは特にない。今後、できる限り多くの機会を得て成果を発信し、寄せられた反響をもとにいっそう深く考察を加えていくこととする。

今後の展望としては、今回の研究成果を土台にして、引き続き前述の長期的研究目標（大英帝国の衰退と同時代英国小説に顕在／隠蔽化されているマスキュリニティ・クライシスとの相関関係の立証）に則った研究を推進していく。具体的には、弱体化した男性性を持つ登場人物と関わりの深い女性登場人物にスポットライトをあて、男性性の弱体化の問題意識に基づくキプリングの女性作中人物に関する包括的研究を行いたいと考えている。この将来的研究では、（１）前景化されている女性登場人物だけでなく、後景化された脇役的女性登場人物も考察の対象に含め、（２）男性登場人物の時と同様に系譜の作成を試みる。この研究は、女性登場人物に的を絞った研究でありながら、実は形を変えたマスキュリニティ研究であり、過去の科研費研究の成果が十分に活かせるものであると信じる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２　件）

①<u>松本　和子</u>　『ありす 英米文学研究』、英文学研究誌、査読有、３４巻、２０１５年、最終校正中（掲載決定済み）

②<u>松本　和子</u>　『東京理科大学紀要 教養篇』、大学紀要、査読有、第４６巻、２０１４年、１４３－１５５

〔学会発表〕（計　０　件）

〔図書〕（計　０　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕　なし

ホームページ等　　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
松本　和子　（MATSUMOTO Kazuko）
東京理科大学工学部・教授
研究者番号：　９０３８５５４２

研究者番号：

(2)研究分担者　なし
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者　なし
(　　)

研究者番号：